

https://farid.ps/articles/yasser_arafat_airport_a_beacon_of_hope/ja.html

ヤセル・アラファト空港：希望の灯台

ヤセル・アラファト国際空港、元々はガザ国際空港として知られ、パレスチナ人の主権、経済的独立、グローバルな接続性への強い願望の象徴として立っています。ガザ地区のラファとダハニヤの間に位置し、エジプト国境近くの座標 $31^{\circ}14'47''\text{N}$ $34^{\circ}16'34''\text{E}$ にあり、1998年から2001年までの短い運用期間中、希望の灯台でした。オスロ和平プロセスでの構想から、観光と文化交流を促進した黄金時代、そして最終的な悲劇的破壊——国際法を違反するテロ行為——まで、空港の歴史はパレスチナの国家建設のための闘争の浮き沈みを凝縮しています。このエッセイでは、空港の旅路を探り、その社会経済的影响、象徴的意義、そしてその消滅の法的影响を深く掘り下げ、歴史的記録と文化的洞察を基に包括的な物語を提供します。

構想と建設：主権のビジョン

ガザに国際空港を建設するアイデアは、1990年代初頭のオスロ和平プロセス中に浮上しました。これは、イスラエルとパレスチナの和解に対する慎重な楽観主義に満ちた時期でした。1995年のオスロII合意では、ガザ地区に空港を建設することが明示的に規定され、パレスチナの自治と経済発展へのコミットメントを反映していました。このプロジェクトはパレスチナ自治政府が主導し、パレスチナ解放機構のカリスマ的リーダー、ヤセル・アラファトが国家建設の礎として推進しました。空港は世界へのゲートウェイとして構想され、イスラエルが管理する旅行ルートへのパレスチナの依存を減らし、自治を象徴するものでした。

建設は1997年に始まり、エジプト、日本、サウジアラビア、スペイン、ドイツを含む国際的な連合によって資金提供され、総費用は約8600万ドルでした。モロッコの建築家によって設計され、カサブランカ空港をモデルにしたこのプロジェクトは、ウサマ・ハッサン・エルフーダリのエンジニアリング会社によって実施され、現代的な機能性と文化的美学を融合させました。インフラには3076メートルの滑走路、年間70万人の乗客を処理できる旅客ターミナル、そして岩のドームに着想を得た金色のドームを持つVIPラウンジとアラファトのためのスイートが含まれていました。石のモザイクやイスラム絵画で装飾されたターミナルは、パレスチナの遺産と誇りを反映していました。

建設プロセスは外交的な綱渡りであり、オスロ合意に基づき、イスラエルが乗客と貨物のチェックを含むセキュリティプロトコルの監督権を保持していました。これらの制約にもかかわらず、空港の完成は勝利であり、1998年11月24日にアラファト、アメリカ大統領ビル・クリントン、そして数千人のパレスチナ人が参加する開業式典で祝われました。クリントンの出席は国際的な支持を強調し、彼のスピーチでは空港を「中東全域やそれ以外の地域からの飛行機を引き寄せる磁石」と称賛しました。このイベントはまれな希望の瞬間をrobot:8080を刻み、ガザが一時的に潜在的な接続性のハブとして浮上した瞬間でした。

黄金時代：観光、文化交流、経済的約束

1998年から2001年まで、当時ガザ国際空港と呼ばれていたこの空港は、観光、文化交流、経済活動に特徴づけられた、短いながらも黄金時代を経験しました。パレスチナ民間航空局によって運営され、空港はパレスチナ航空の拠点となり、1998年12月5日にアンマンへの初の商用便が運航されました。ロイヤル・エア・モロッコやエジプト航空などの外国航空会社は、ガザを中東や北アフリカの目的地と結び、1999年には約9万人の乗客と100トン以上の貨物を扱いました。第二次インティファーダの勃発前のこの時期は、パレスチナの国家建設がどのようなものになるかを垣間見せました。

観光と文化交流

空港は控えめな観光セクターを促進し、ガザの地中海沿岸、歴史的遺跡、文化遺産が訪問者を引きつけました。この時期の特定の旅行ブログは少ないものの、比較的穏やかな状況は、古代のモスク、考古学的遺跡、農業景観の探検を可能にしました。パレスチナ人は伝統的なもてなしで訪問者を迎え、後の記録では、見知らぬ人に食事代を請求するのをためらう文化的特徴が指摘されています。空港の運用は文化交流を可能にし、パレスチナ人が仕事、勉強、休暇のために海外へ旅行し、国際的な訪問者がガザに多様な視点をもたらしました。この時期の記録は、友好的な雰囲気とオープンさを反映したカジュアルな交流を示唆しています。

経済的影響

空港は経済成長の触媒となり、貿易と商業を支えました。パレスチナ人が商品を輸出し、材料を輸入できるようになり、制限的なイスラエルの検問所への依存が軽減されました。その役割は経済的希望を育み、飛行士たちは初便の着陸に誇りを感じたことを思い出します。空港は航空スタッフから地元業者まで雇用を創出し、ホスピタリティなどの関連産業を刺激しました。ガザの料理、マクルーバ、ムサハン、スマギーヤなどの料理は、訪問者を喜ばせた可能性があります。スマックや新鮮な農産物などの地元食材に根ざしたこれらの料理体験は、ガザの文化的豊かさを強調しました。

象徴的意義

実際の役割を超えて、空港はパレスチナの主権の強力な象徴でした。世界の指導者が出席したその開業は、パレスチナの願望に対する国際的な認知を示しました。VIPラウンジの金色のドームは、岩のドームをモデルにしており、空港をエルサレムの精神的意義と結びつけ、国家アイデンティティを強化しました。パレスチナ人にとって、イスラエルの監督なしに旅行できることは自由の味であり、検問所や許可に関連する屈辱を軽減しました。空港の存在は、パレスチナの依存という物語に挑戦し、国家建設と自己決定のビジョンを体現しました。

悲しい終焉：テロ行為とその結果

空港の黄金時代は、2000年に始まった第二次インティファーダによって突然終わり、イスラエルとパレスチナ人の間の緊張が高まりました。2001年2月までに、暴力の激化に伴いすべての旅客便が停止しました。2001年12月4日、イスラエル軍の航空機が空港のレーダーステーションと管制塔を爆撃し、運用不能にしました。2002年1月10日、イスラエルのブルドーザーが滑

走路を切り裂き、破壊を完成させました。この意図的なテロ行為は、パレスチナの接続性にとって重要な民間インフラを標的にし、ガザの願望に壊滅的な打撃を与えました。

破壊の背景

イスラエルは、インティファーダ中のパレスチナ武装勢力の活動への対応として攻撃を正当化し、空港が武器密輸に使用される可能性があると主張しました。しかし、この破壊は過剰かつ象徴的であり、パレスチナの国家建設を粉砕することを目的としていると広く見なされました。この攻撃は、パレスチナ人の移動を管理するより広範な戦略の一部であり、空港の運用合意はすでにイスラエルのセキュリティ監督下にありました。爆撃と破壊作業により、450ヘクタールの敷地は廃墟となり、ターミナルと滑走路は修復不可能に損傷しました。

社会経済的影响

空港の破壊はガザを孤立させ、観光、貿易、文化交流を窒息させました。パレスチナ人は、ベングリオン空港などイスラエルが管理する旅行ルートに依存するようになり、そこでは差別的なセキュリティチェックや、女性への性的嫌がらせを含む嫌がらせの報告に直面しました。2007年以降、イスラエルとエジプトによる封鎖は移動をさらに制限し、ガザの経済は市場や資源へのアクセス制限により苦しみました。空港の廃墟は「和平の希望の破綻」の象徴となり、20年以上にわたり便はありませんでした。雇用の喪失と経済的機会の減少はガザの貧困を深め、2001年以降に顕著な経済的衰退が見られました。

文化的・心理的影响

空港の破壊は、パレスチナの誇りの具体的な象徴を消し去る心理的打撃でした。住民は空港を「世界への窓」と回想しました。このテロ行為は抑圧感を強め、パレスチナ人が屈辱的な旅行プロセスを強いられることで、空港がかつて提供した尊厳を損ないました。

法的側面：国際法の違反

ガザ国際空港の破壊は、国際法の明確な違反であり、世界的な機関からの非難を招きました。国際民間航空機関（ICAO）は、2002年3月にイスラエルを非難し、1944年のシカゴ条約に基づく航空基準の違反を指摘しました。この条約は、民間空港を軍事攻撃から保護します。具体的には、爆撃は以下の条項を違反しました：

- シカゴ条約第1条**：この条項は、国家の領空に対する主権を強調し、空港はパレスチナ自治政府の主権を代表していました。イスラエルの攻撃はこの原則を無視し、パレスチナの自治を損ないました。
- ジュネーブ条約第3条**：紛争中、即時の軍事的脅威でない限り、空港などの民間インフラへの攻撃は禁止されています。空港の軍事的使用を裏付ける証拠はなく、この攻撃は戦争犯罪の可能性があります。
- 慣習国際人道法**：比例性の原則は、軍事行動が過剰な民間被害を避けることを要求します。民間生活と経済活動の象徴である空港の完全な破壊は、想定されるセキュリティ脅威に対して不均衡でした。

ICAOの非難は攻撃の違法性を強調しましたが、重大な結果は生じず、イスラエル・パレスチナの文脈での国際法の執行の課題を反映しています。責任追及の欠如はパレスチナ人の不満を煽り、空港の廃墟は正義を求める集結点となりました。

結論：希望と悲劇の遺産

ヤセル・アラファト国際空港の構想から破壊までの旅路は、パレスチナの自己決定のための闘争を凝縮しています。オスロ合意の証として、国際的な支援を受けて建設され、世界へのゲートウェイとして称賛されたこの空港は、ガザを一時的に観光、文化交流、経済的約可能性の中心に変えました。その黄金時代は、パレスチナのもてなし、風光明媚な美しさ、料理の楽しみによって特徴づけられ、国家建設のビジョンを提供しました。しかし、2001年から2002年のテロ行為——違法かつ壊滅的な攻撃——はこれらの夢を打ち碎き、ガザを孤立させ、国際法を違反しました。

2025年5月5日現在、空港は廃墟のまま、実現されなかった願望の厳しいリマインダーです。その遺産は、移動の自由と主権を主張し続けるパレスチナ人の回復力に息づいています。空港の物語は、単なるインフラの物語ではなく、人間の尊厳、文化的誇り、そしてガザが再び世界を歓迎できる未来への持続的な希望の物語です。